

# 1968年再考

## グローバル関係学からのアプローチ

「世界が揺れた年」とも評される1968年。この時、欧米、そして日本では学生運動の嵐が吹き荒れ、中国では文化大革命が進行中だった。1960年代後半は、テレビが急速に普及し、通信衛星による世界同時中継が可能になった時期でもある。パリの学生が「我々はテレビを通じて世界とつながっている」と言い放ったのは象徴的である。

1968年は、世界各地が瞬時にして繋がり、相互に関連し合う新しい時代の起点として認識され、そして記憶された。

だが、実際のところ世界はどのように繋がったのだろうか。このシンポジウムでは、世界各地の連関性に着目するグローバル関係学の視点から、1968年の意義について検討する。また、アフリカやラテンアメリカなど、これまでの1968年論ではあまり議論されてこなかった地域にも焦点を当て、世界各地が結びつく、あるいは結びつかないメカニズムについて考えてみたい。

日時 2018年12月15日(土) 14:00-17:00

場所 東京大学本郷キャンパス・福武ホール

基調講演

クラウディア・デリクス (ベルリン・フンボルト大学)

日本の1968年とムスリム世界の1968年——ヨーロッパの視点から

小熊英二 (慶応大学)

「1968」とは何だったのか、何であるのか——グローバルな観点から見た日本の経験

司会

酒井啓子 (千葉大学)

討論者

松井康浩 (九州大学)・小倉英敬 (神奈川大学)

※ デリクス氏の講演のみ英語(通訳なし)で行われますが、  
質疑応答については通訳が付きます。

日時 2018年12月16日(日) 10:00-17:00

場所 東京大学本郷キャンパス・東洋文化研究所大会議室

第1セッション：旧ソ連・東欧 (10:00-12:00)

加藤久子 (國學院大学)

ポーランド「三月事件」を結ぶ点と線——ワルシャワ、バチカン、エルサレム

井関正久 (中央大学)

1968年から半世紀を経て——ドイツの場合

松井康浩 (九州大学)

ソ連・西欧知識人の越境的連帯とその意義——起点としての1968年

司会 中井杏奈 (中央ヨーロッパ大学・ハンガリー)

討論者 藤澤潤 (神戸大学)

第2セッション：中東、アフリカ、ラテンアメリカ (13:30-15:30)

真島一郎 (東京外国語大学)

セネガルの1968年5月

山本薫 (東京外国語大学)

レバノン小説が描いたアラブ諸国の1968年

小倉英敬 (神奈川大学)

ラテンアメリカ1968年——「中間層」主体の変革運動

司会 後藤絵美 (東京大学)

討論者 梅崎透 (フェリス女学院大学)

総合討論 (15:45-17:00)

司会 福田宏 (成城大学)

主催：科学研究費助成事業(新学術領域研究)「グローバル関係学」

B01班「規範とアイデンティティー」およびB02班「越境的非国家ネットワーク」

科研費  
KAKENHI

